

第5セッション「多分野的研究から見る内陸西北部の社会と文化」

報告

歴史記憶をめぐって—西北「回民起義」に関する語り—

◆田村和彦氏報告に対するコメント◆

櫻井 龍彦

＜名古屋大学＞

田村和彦氏のフィールドは陝西省関中平原（渭河流域に広がる平原地帯）の農村地域である。フィールド調査のなかで、しばしば19世紀の回民起義の伝承を耳にし、その歴史の語られ方に関心を抱いて資料を収集してきたという。

唐の時代、中国は外国人には非常に開放的であった。内乱を鎮圧するためにアラブなどの軍隊に協力を依頼することもあった。平定後、中国に残った兵隊たちの一部は、長安の南にある「沙苑」というところを居留地にした。「沙苑」は渭水に臨む地で、のち長く回族の故郷でありつづけ、いまでも回族の集住地となっている（張承志『回教から見た中国：民族・宗教・国家』中公新書、1993：15）。

こうした歴史的経緯をもつ地域で田村氏が聞き取った回族の起義は、もっぱら漢族をインフォーマントとして取得した情報で、回族からのものではないが、その蜂起事件の意味するところを考察し、歴史における記憶ならびに記録の問題について論じている。19世紀後半、同治年間、陝西省の回族は戦乱と虐殺によって、九割が犠牲になったといわれる。望むらくは回族の記憶がほしい。しかしそれはない。災難から逃れ、ロシアに亡命した回族がその後、キルギス、ウズベクなどに落ちつき、その地で「東干」と呼ばれるようになったというから（張承志1993：90）、今後は「東干」の調査に期待したい。

田村氏の発表の際、筆者は司会をつとめ、コメンテーターではなかったため自分の意見を述べる機会はなかった。しかし氏の発表に刺激されて少し考えるところがあったので、それを書いてみたいと思う。

● 歴史の記憶には2種類あるように思う。

1つは〈ともにしたい記憶〉、つまり共有される記憶である。

1つは〈伝えていきたい記憶〉、つまり伝承される記憶である。

前者を「共時的な記憶」、後者を「通時的な記憶」といってもいいだろう。

記憶の主体は前者の場合、「同時代のわれわれ」。多くは歴史的過去の経験を共有するか、おなじ原体験を仲間としてともにしたいという欲求である。これはわれわれ意識つまりアイデンティティの形成につながる。

後者の場合、主体は「世代間のわれわれ」。後世に伝えていきたいという欲求で、経験者と血縁的、地縁的つながりがある者が継承していく期待である。これは同時代のわれわれが共有したアイデンティティを、世代を超えて保持していくことにつながる。

もちろん両者を別個と考える必要はない。〈ともにしたい記憶〉が現在のものだけでなく、過去の経験の共有化もふくむ以上、〈伝えていきたい記憶〉がそこに重なることは自然である。

● 中国という社会体制では、歴史的経験が起義、反乱のような反体制的な出来事であった場合、体制側の圧力によって記憶は政治的に封印されてしまうことがある。ときに経験者が体制内で生きていかねばならぬ情勢を察知して、自ら進んで封印することもあるだろう。そこで記憶の共有が不可能となれば、当然記憶の伝承もなくなってしまう。

時代が変遷し、政治社会的な環境が変わって、封印されていた記憶が呼びさまされるときがある。そのとき、記憶の掘り起こしがおこるが、原体験を共有した人はもういないため、後世の人びと、特に子孫に相当する人びとが、いろいろな手段を使って記憶を再現し、ときには再解釈して、いまここに再生させる。その記憶を祖先への痛切な想いから、いまここに生きている人びとが集団的に共有しようとする。こうして復活した記憶がある時代に共有されると、それがまた通時的に後世に長く伝達されるように、記憶の伝承化がはじまる。

過去の出来事がいまここに生きる自分たちのアイデンティティの拠り所として、記憶を再生させ、共有し、伝承していくという行為が、現代の中国においてどのように可能なかが問題である。多民族国家としての中国の社会体制のなかで、いまここに生きる当事者は、どのような手段をつかって、どのような経路をとおして、歴史記憶の共有と分有をおこなっているのか。記憶の共有が経験者につながる人びとだけではなく、地域ひろくは「国家」の記憶として多民族の「国民」に分有され共有されることはありうるのか。言い換えれば、ともにしたい記憶は、だれとともに分かちあえるのか、伝えたい記憶は、だれに向かってなしうるのかという問題でもある。

● 皮肉なことに回族の場合、その記憶を記録するためには「漢字」を使わなければならない。この現象は回族だけではない。56の民族のうち固有の文字をもつのは21、固有の言葉をもつのは53という。半分以上は自分たちの言葉を他民族である漢族の「漢字」で表現するほかはない境遇にあるということだ。

アイデンティティの凝集に文字の効果を期待できない回族は、イスラーム教を信仰するという一点でのみ、共通のアイデンティティをもつといえる。今日彼らが強い民族意識をもつ背景には、信仰とかかわりがある、というよりこの信仰を持つがゆえに引き起こした歴史を共有しているという点が大きい。それは支配民族との対立のなかで、多くの殉教者を出してきたという受難の歴史である。

それも遠い過去ではなく、近年においてもそうであったという歴史体験が彼らの記憶を鮮明にして、民族としての結束を固めている（おなじことはウイグル族にもチベット族にもいえる）。弾圧と犠牲の歴史は、加害と被害との関係に立てば、和解のシステムを通過しない限り、支配民族と共有困難な歴史である。

民族としての回族の存立を考えると、イスラーム信仰に加えて、抑圧された歴史記憶に注目すべきであろう。この抑圧はいまでも侮教事件として民族差別の形で現れ、過去の歴史経験と記憶は再生産され続けている。

この記憶の共有と伝承こそが、回族がこれだけ全土に散らばって居住していても、固有の言葉や文字をもたなくても、ひとつの民族として結束しうる要因ではないだろうか。

● 回族が果たして民族か、という議論は以前からある。スターリンの民族に関する定義からいっても言語がなく、地域もなく（全国に分散）、経済生活もない。だから回族はイスラーム信仰と共通のアイデンティティの2つだけで漢族と区別されるといわれる。

費孝通は「中華民族多元一体構造論」（構造は訳語で、もとの中国語は格局）によって、「中華民族」を「多元にして一体の構造と様式」をもつと主張した。この多元一体の意味は、漢族を中核にして諸民族が長期にわたり接触、混合、融合した結果、「中華民族」として形成されたということである。こうしたプロセスによってまず「自在的民族実態」が形成され、その後、西方列強からの圧力に対抗することを通じて自覚的な民族実態が形成されたとする。

この考えを援用すれば、回族は歴史上「自在的民族実態」に編成されてしまったとはいえ、「自覚的民族実態」として、「中華民族」を離脱する可能性を秘めていることになる。つまり「自在的民族実態」に組み込まれたとはいうものの、形成過程で反乱運動を起こしてきた彼らは、常に「叛」や「匪」のレッテルがはられた（松本ますみ「中国のイスラーム新文化運動」『現代イスラーム思想と政治運動』（イスラーム地域研究叢書2）東京大学出版会、2003:146）。そのことが、かえって排他的に自分たちを凝集させる「自覚」を植えつけ、回族としての自意識が強化されてきた。回族は全国に散らばり、生活も多様であったが、殉教の歴史が彼らの独立した民族としての自覚を促した。

支配的な集団に対抗するには、そして自分たちの安全保障を確保するためには、回族は「民族」でなければならない。民国時代の国民党が規定したようなイスラームという特殊な信仰を持つ宗教的少数者では存立できない。国家に包摂されながらも支配的民族から自らを定義しようとする存在になるために、一個の「民族」になる必要がある。

しかし多民族国家中国で求められるのは、回族のエスニック・アイデンティティだけが伸張する事態ではなく、それがナショナル・アイデンティティ＝国家意識・国民意識に結びつく政策であろう。回族自身がいま独立や離脱を志向することはないとはいえ、エスニックな紛争が起きている現実には、依然としてある。

歴史記憶という視点から言えば、現中国政権はローカルメモリーとしての少数民族の歴史（この場合、主として起義）をどのような手続きをへて国家のパブリックメモリーとして記録化するだろうか。それを後世に伝承されるべき公的な記憶として他者にも分有され、伝承されるものとして認めうるのか。可能とすればいかなる経路をとって可能となるのか。記憶の数だけ歴史があると認めてしまえば、国家の歴史は成立しなくなってしまう。そのジレンマに国家はどう堪えうるのか。

● 記憶の伝承にとって最大の課題は風化である。個人的なものであれ、集団的なものであれ、一定の努力なしに記憶の保持や伝承は成り立たない。特に「世代間のわれわれ」のあいだで記憶を維持していくためには、文字による記録媒体がないならば、代替の「記憶装置」が必要になる。

一定の努力というものが、決して容易なものではないことをジャクリーン・アーミホフセイの論考「生存を可能にする語り：西南中国のムスリムと1873年の虐殺の記憶」（『トレイシーズ』2、岩波書店、2002）から考えてみよう。それは凄絶とも言える覚悟と選択による結果であることをわれわれは知ることになるだろう。

アーミホ-フセインは、自らのフィールドワークによって得た雲南回族の深く重い「語り」を紹介している。「1873年の虐殺」とは、よく知られるように、大理に政権をうち立てて清朝政府と対立した杜文秀と回族が、1873年、政府軍の大理侵攻によって虐殺された事件である。

雲南のムスリムは清朝以降、国家による組織的な虐殺の歴史をもつが、その虐殺を生き延びたものとその子孫がどのようにこの出来事を記憶し、伝えてきたか。それは書き残したのではなく、口承を通してであった。

この虐殺を生き延びたごく少数の人は、大半が若い女性であった。それは清軍の兵士、官吏、男たちが回族の女性を妾にする目的で生かしたのである。生存者には抵抗して自殺するものもいたが、生まれる子供をムスリムとして育てることを条件に妾になることを承諾した。もちろんこの条件がまれない場合もあった。しかし母親は秘かにイスラームの歴史や信仰について子どもたちに教えた。なぜか。少数の女性だけによっていま共有されている民族の記憶を後世に伝えるためである。子どもが成長し、結婚することによって、回族として家を立て直すためである。秘匿された策略によって、ムスリムの共同体は存続されるという信念。

敵と取り引きしながら選択した行為は、民族の覚悟をおもわせる。それも女性というジェンダーによる覚悟である。いまここに生きる雲南の回族が、このように先祖の女性を語るとき、決して後ろめたさ、恥、不名誉はない。普通なら、敵の男性によって蹂躪されたこと、生まれた子供は敵の血が入り汚染された不純物であることをもって、もとの共同体によって受け入れられることはないであろう。身内から軽蔑、非難、攻撃ときには殺害されることの方が多いと思われる。

しかしここには逆の考えがある。ムスリムの女性を母にもち、彼女たちによって育てられたのだから、子どもはムスリムであるという考えである。男系の血の存続よりも、ムスリム女性の道徳的優位性が重視される。道徳的、精神的に優位であれば、その行為は恥辱ではない。むしろ名誉であり、ムスリム共同体を再建したという強い誇りとなる。

非ムスリムによってレイプされた女性の子であっても、また非ムスリムの養子であってもムスリム共同体は難なく受け入れるところに、イスラーム社会の特徴があるという。それは回族が歴史上、漢族はじめ周辺異民族と通婚してきた事実とも関係があるかもしれない。イスラームには「血の純潔性」という概念はない。この事実からも回族のアイデンティティは血統ではなく、信仰であるということを確認できる。

● アーミホ-フセインの調査は、書かれた記録にもとづくものではない。雲南回族の女性たちの証言である。清朝の虐殺事件から百数十年ものあいだ、このように口頭による記憶の伝承があった。それも女性たちの中で伝えられてきた。わたしたちは、あらためて共同体を維持していく上で、女性が果たした重要な役割を認識するだろう。男性による女性に対する暴力と犠牲に関する語り、共同体の生存を可能にした女性の名誉として語られる事実を知るのである。

文字による記録に代替する「記憶装置」とは、この場合、子どもである。加害者との婚姻に耐えて、出産する行為である。正統な血縁や地縁を越えた再生産で獲得した新しい「世代間のわれわれ」にも伝承が可能であるという策略を選択した女性のもつ強靱さ、そしてそれを承認するイスラーム社会の包容力は刮目すべきである。

大理の町のすぐ外にある川岸に「万人堆」という場所がある。ここは杜文秀に対する清軍の侵攻で、多くの回族が殺されたところといわれる。アーミホ-フセインによると、今日、毎年

この場所で、虐殺がおこった日に犠牲者を追悼して儀式が行われ、祈りが捧げられる。

記憶の伝承には、一般にはこのように悲劇的な出来事がおこった日付と場所が大事である。一定の時間と空間を「記憶装置」として、儀礼行為によって過去の出来事を感覚的に呼びさまし、最大の苦痛を追体験することで集合的記憶は保持、伝承される。

地名である「万人堆」それ自体も、歴史の記憶を刻み込んだものだろう。地名によって人びとは土地の記憶を想起する。地名は一種の記号としての記憶装置である。

歴史上の事件は、犠牲となった英雄的人物を核として記憶が吟味される。イスラームには殉教が多いため、記憶の機能的な装置には、その人物が犠牲になった日を特別な日として行事化される「時間」と、その人物が埋葬された土地や墓などが聖視される「空間」がある。1871年正月13日、磔で殉教したジャフリーア派の馬化龍の首にまつわる「わたしは来た」という伝説を張承志が紹介している（張承志 1993：92～93）。彼のことは毎年正月13日のアマルという教派の行事と馬化龍の首が埋葬された甘肅の張化川にあるコンバイ（拱北）によって、今なお人びとの記憶に根づいている。

このように犠牲の歴史を記憶しておきたいとき、その犠牲者を記念するモノが必要になる。しかしあらゆる物質としてのモノにもまして、装置の最高の主体は記憶力を持つ人間そのものである。母が子を出産する目的が単に子々孫々の繁栄ではなく、歴史記憶の世襲である点に、回族が示す「民族」の矜持があるように思われる。

〈ともにしたい記憶〉を分かちあう集団が壊滅状態におちいても、わずかな生存者が〈伝えていきたい記憶〉の強烈な意志と希望を貫くことで、共同体とその歴史は存続していく。それはまたアーミホーフセインという研究者がいて、はじめてすくい上げられた歴史でもある。こうして「記憶」は定着化（言説化）され「記録」として残った。しかしあとは国民国家がこのローカルなメモリーをナショナルでパブリックなメモリーとして扱うかどうかである。